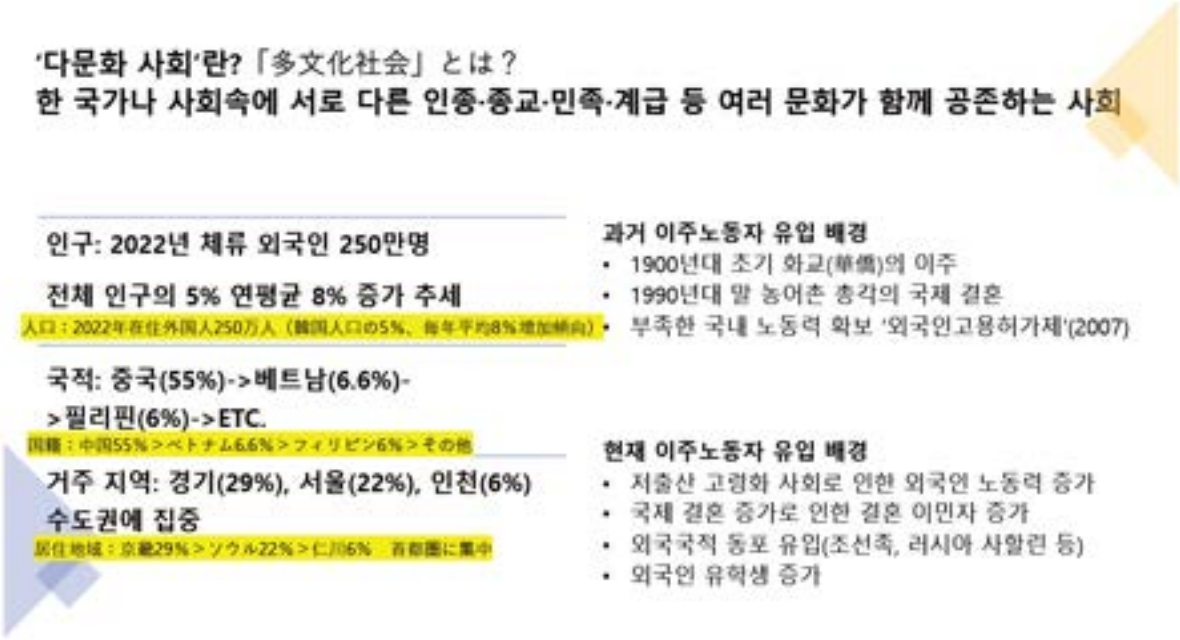
2022年8月20日（土）14:00～16:30
講座C（3日目）

「 韓国の芸術（演劇）教育における多文化共生プログラムについて 」

［講師］安 鎬世（アン・ヨンセ 안용세）
［通訳］沈 炫旼（シム・ヒョンミン 심현민）
［司会］柏木 俊彦

■韓国における多文化の現状～「多文化社会」とは？～

○**アン** こんにちは。本日「韓国の多文化共生演劇教育プログラム」の発表を担当する、韓国の演劇教育家アン・ヨンセと申します。よろしくお願いします。



まず「多文化社会」の定義についてお話したいと思います。「多文化社会」とは、ひとつの国家、社会の中で、異なる人種、宗教、民族、階級など様々な文化が共存する社会と言えると思います。人口で言うと、2022年現在、韓国在住の外国人は250万人。韓国の人口が今5,000万人であることを考えると、全体の5%です。毎年8%ずつ増加しています。

国籍を見ると、中国が最も多くて55%、次がベトナム6.6%、フィリピン6%、そしてその他となっています。アジア、とくに中国系の方が多いことが分かります。

そうした方々が住んでいる地域は、昨日のユさんの話にも出てきたキョンギ（京畿）道が最も多くて29%、続いて首都のソウルが22%、空港で有名なインチョン（仁川）が6%。全て首都圏に集中していることが分かります。

過去において韓国に移住労働者たちが入ってきた背景は以下のとおりです。

・1900年代、中国からの移民（華僑）が多かった。
・1990年代末、農業や漁業の盛んな地方都市の適齢期の男性が結婚できないという問題があり、それをベトナムやフィリピンの女性との国際結婚で解消する。若者たちが都市に行ってしまうのを止めるために、そうした動きがあった。
・ 2007年から、国内の労働力確保のために、政府が「外国人雇用許可制」を導入、そこから移住労働者が増えてきた。

最近、移住労働者が増えている背景は以下のとおりです。

・ （日本と同じく）韓国も少子高齢化により外国人労働者の需要が増えている。
・ 農業、漁業の盛んな都市だけでなく一般の都市においても国際結婚が増加し、それに伴う移民が増えた。
・ 韓国にルーツを持っている海外在住の人々が韓国に戻ってきている。（中国の朝鮮族、ロシア・サハリンにいた朝鮮系の人々……韓国では「高麗人」と呼ぶ、等）
・ 外国人留学生の増加

■ 多文化の街、アンサン市ウォンゴク洞

キョンギ道のアンサン市ウォンゴク洞は外国人が最も多く住んでいる町として知られています。多文化町特区として国から指定を受け、国境のない町と呼ばれます。住民10名中7名以上が外国人。小学校における韓国人学生の割合は20%。

※韓国では小学生から大学生まで、全て「学生」と呼ぶ。

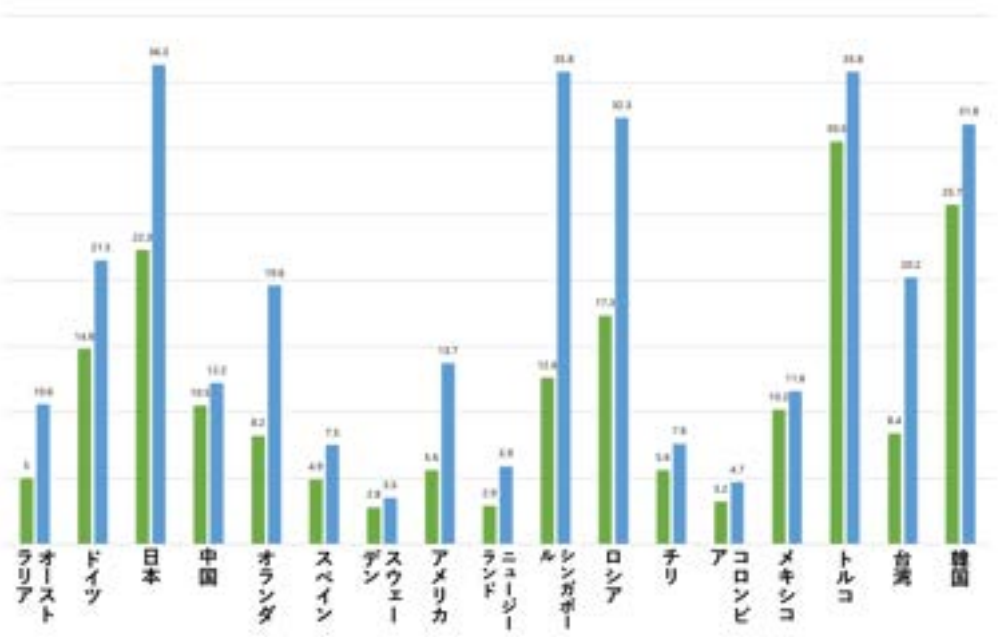
ウォンゴク洞は多文化に関して活性化されており、システムもよく構築されています。多文化に関連するモデルになっていて研究でもよく取り上げられます。私が関わるプロジェクトの中でもここで行われるものが多くあります。

ここで「多文化」というのは、「外国にルーツを持っている」という意味です。では「多文化」の学生は、いま韓国にどのくらいいるのか。現在14万7000人。2013年の3倍です。左側の折れ線グラフ、韓国の青少年（9～24才）は全人口に対する割合が年々減っています。

そして折れ線グラフの右側、「多文化」学生はどんどん増えており、学生数全体の3%近くを占めています。このままだと2040年には全人口に対して10.4%しか青少年がいないことになりますが、多文化の学生数は増えています。

■「多文化＝外国ルーツ」の家族に対する韓国の受容性

【隣人になりたくないと答えた人の割合（15′国民多文化受容性調査研究）】



左 … 他の人種の人

右 … 外国人労働者／移民者

これは､｢多文化家族｣※の隣人になりたくないと答えた人の割合を示したグラフです。韓国で多文化ルーツを持つ人に対する認識は多少改善されているとは言われていますが、全般的に受容性は非常に低く、多文化社会に対する否定的な認識、差別するような情緒が増えています。

韓国は他国と比べたときに、ほかの人種の労働者と隣人になりたくないと答える人の比率が非常に高いです。この表を見ると日本も同じようですね。韓国では移民に対して韓国の文化・習慣に従うように要求する傾向＝一方的同化期待が増えています。

※海外にルーツを持っているメンバーが含まれる家族を「多文化家族」と呼ぶ。それが、国際結婚によるものか、移民によるものなのか等、理由は問わない。通訳のシム氏によれば、『ここで言う「多文化家族」について、日本語の中で意味が完全に合致する言葉はないように思われる。強いて言えば、「多文化」＝「外国人」という考え方が一番近いが、「多文化家庭･家族」と言う場合、親のどちらかが外国人の場合もあれば、両方の場合もあるので、留意が必要』とのこと。

多文化社会が、急に広がっている、受け入れる準備ができていないのにどんどん広がっているという認識があります。色々反省も必要ですし、我々はこの状況をどうやって改善していけるかを研究しています。

■ 多文化に対する受容性の改善可能性

多文化に対する受容性の改善可能性について

多文化関連活動参加有無による受容性の改善程度（15'国民多文化受容性調整研究）

こちらのグラフは多文化に対する受容性を改善するために何を行ったらいいか、行ったときにどういう効果が得られるかの研究調査です。赤の線（棒線）は、さまざまな経験がないとき、青の線（点線）は、さまざまな経験をしたあとです。青のほうが広がっているのが分かります。広がったほうが改善されている状態を示しています。

これを見ると、韓国は単一民族主義の情緒が根強い分、人々の認識や受け入れ態度が変化するには相当の時間がかかると見られますが、さまざまな活動に参加することによって改善可能だと期待されています。この表でも分かるように移住民との接触の頻度が高いほど、また多文化教育やイベントに参加した経験が多いほど、受容性の改善にポジティブな効果を与えていると見られます。

このグラフは2015年のもので、古いデータではあるのですが、これをベースにこれからどうして行けばいいのかということを考える中で、文化的とか教育的とかに限られたものではなく、基本的な素養として普遍的に行う方向性を考える、文化多様性というキーワードを掲げて事業を行ったのが文化芸術教育という分野になります。

■ 各自治体別、多文化芸術教育事業について

これから自治体の文化財団を中心としてお話したいと思います。

韓国における、各自治体別、多文化芸術教育事業について紹介します。

事業の中でも代表的なものです。このセミナーで何度も出てきた韓国文化芸術教育振興院＝アルテは、一番大きい組織であり、全国単位の規模で事業を総括運営しています。それから自治体の文化財団として大きなものはキョンギ道とソウルの文化財団です。これ以外にも各自治体がそれぞれ文化財団を持っていますので、全国的に115団体ぐらいが運営されています。

この3つの組織（キョンギ道とソウルの各文化財団と、アルテ）をご紹介する理由は、最初にもお話した通り、韓国では多文化＝外国ルーツの方々が首都圏に集中していますので、首都圏の2つの自治体文化財団、そして全国規模で事業をやっているアルテを紹介することで、大部分をカバーできると考えたからです。

自治体の文化財団とアルテは連携をとって活動しています。その活動の柱は「学校文化芸術教育」、「社会文化芸術教育」、それから「専門人材の育成研修」、「教育プログラムの開発および政策研究」、「国際交流および広報」、「オンライン文化芸術教育支援事業」などがありますが、その中でも、「社会文化芸術教育」の中に、多文化社会をテーマにした事業や、社会におけるマイノリティーの方（海外にルーツを持つ方）を対象とした、国際交流を行う事業があります。

「社会文化芸術教育」分野の事業リスト

◆ソウル市民芸術大学
◆軍人対象　文化芸術教育支援
◆矯正施設受容者対象
◆精神疾患者対象
◆少年刑務所の学生対象
◆脱学校・脱家庭青少年対象
◆地域児童センター利用児童・青少年対象
◆文化芸術治癒プログラム支援

夢が広がる土曜文化学校
夢のオーケストラ事業
夢の舞踊団事業

◆クリエイティブ芸術教育
◆児童文化芸術教育支援
◆文化芸術教育士の現場力量強化
◆自治区芸術教育活性化
◆その他

私自身も多文化問題に興味がありまして、関連プロジェクトを自分で立ち上げたり多く行ったりしてきました。これだけ様々な対象に対しての事業があります。韓国独特の、軍を対象としたものもあり、犯罪関連で矯正施設に入っている人を対象にしたものもあります。少年刑務所の学生に対するもの、脱学校・脱家庭＝学校に行けていないとか家出をしてしまった青少年対象のものもあります。

スマイルマークがついているのは「夢シリーズ」といって、本日皆さんにご紹介したいものです。この中でも「夢が広がる土曜文化学校」は一番規模も大きく、活発に行われているものです。

その下の「クリエイティブ芸術教育」や「児童文化芸術教育支援」などは今でも続いているものです。「文化芸術教育士」は昨日ユ・ウンジョンさんが紹介されたと思います。

資格を取ったばかりの人に対して、現場で力をうまく発揮できるように強化する研修も行っています。自治区芸術教育活性化では、市民が芸術に触れる機会を持てるようにしています。このように「社会文化芸術教育」の中にはさまざまな事業が含まれています。

このリストの中の4項目（地域児童センター利用児童・青少年対象、夢広がる土曜文化学校、夢のオーケストラ事業、夢の舞踏団事業）に、多文化の芸術教育が含まれています。中でも「夢が広がる土曜文化学校」は、私自身も2020年から2年間関わらせていただきましたが、これもキョンギ道のアンサン市で行われました。多文化学生だけでなく韓国の学生も、それからアンサン市に住んでいる障がいを持っている青少年も一緒に

集めてオンラインで、メタバースというところで……Roblox（注：オンライン・ゲーミング・プラットフォームの名称）の中で、子どもたちに芸術教育を行いました。

これはやはりアンサン市だったからできたプログラムだと感じました。多文化教育に合った対象をすぐに見つけられるということもありますし、こうした活動に対して開かれている市民が多く、プログラムを組みやすかったです。

地域児童センターで行われるプログラムにも関わらせていただきました。会場が限られているということもあって、多文化向けのプログラムは単発で終わるものが多いのですが、アンサン市ではその地域性もあり、1年以上持続しました。子どもたちと続けて会うことができるのは大きな利点で、私自身、満足感もありましたし、「多文化の学生に対する芸術教育は必要なのだ」という意識が地域にあるので、受け入れられやすいということもありました。

■ 文化多様性教育

문화다양성이란?

- 2010년 이후 다문화 사회에서 '문화다양성'의 개념이 등장함
- 민족, 언어, 사회문화적 배경, 종교 등 사람들 사이의 문화적 차이를 포괄하는 개념
- 문화적으로 다양한 배경을 가진 사회의 구성원들을 수용하고 함께 생활하는 환경을 구성하기 위해, 다양한 문화를 가치 있는 것으로 인정

	소극적 다문화주의 교육정책	문화다양성 교육정책
교육대상	사회문화적 소수자, 이주민	다수자와 소수자를 포함한 모두
관점	동일성 및 단일성의 동화주의	다양성에 기초한 사회통합
집단형태	정적 결회체(society)	역동적 공동체(community)
정체성	고정적 자아, 유아론적 자아	이중문교적, 유동적인 정체성
정책방향	일방적 원조, 시혜적 접근	상호 호혜적, 상호의존성
접근방식	가시적인 문화 및 교육정책	미시적 접근, 일상생활(routine)
교육과정	분리 및 추가적인 교육과정	범 교과를 통한 통합적 교육과정
권력관계	수직적 권력관계에 기초	수평적 권력관계에 기초
교수방식	차이 인식, 교화(edification)	차이에 대한 이해와 실천, 대화
정책실현	체계적인 프로그램, 일회성	새로운 관점과 접근, 관계성

문화다양성교육의 12가지 핵심가치
文化多様性教育においてキーとなる12の価値

1. 존중(respect) **尊重**
2. 관용 및 포용 (tolerance & inclusion) **寛容及び包容**
3. 인권 및 평등 (human right & equity) **人権および平等**
4. 차이(difference) **違い**
5. 시민성(citizenship) **市民性**
6. 대화(dialogue) **対話**
7. 연대 및 결합 (solidarity & cohesion) **連帯及び結合**
8. 상호의존성(interdependence) **総合依存性**
9. 문화적 민감성, 적절성 (cultural sensitivity) **文化的に敏感であること、適定性**
10. 공존(co-existence) **共存**
11. 협력(collaboration) **協力**
12. 사회적 정의(social justice) **社会的正義**

多文化の学生たちに、どのように芸術文化教育を行うかという方向性についてですが、2010年に「文化多様性」というキーワードが出てくることでかなり変わってきたと思います。これは、民族、言語、社会文化的背景、宗教など様々な違いをすべて包括する概念 として出てきました。文化的に色々な背景を持っている社会の構成員を受け入れながら、 共に暮らしていく環境を作るために、多様な文化の価値を認めるというものです。

文化多様性教育政策の特徴（vs.消極的多文化主義教育政策）

	消極的多文化主義教育政策	文化多様性教育政策
教育対象	社会的マイノリティー、移住民	マジョリティーとマイノリティーをすべて含む
観点	同一性及び単一性の同化主義	多様性に基づいた社会統合
集団の形態	静的集団（社会）	活発な動きのある共同体（コミュニティ）
アイデンティティー	固定的な自我、利己主義的な自我	異種混交的、流動的なアイデンティティー
政策の方向性	一方的な支援、片方が恩恵を与える形	相互にとって嬉しい、相互依存性
アプローチ	巨視的文化及び教育政策	微視的アプローチ、日常生活（ルーティン）
教育課程	分離及び追加的な教育課程	全教科を通した統合的教育課程
権力関係	垂直的権力関係に基づく	水平的な権力関係に基づく
教授方法	違いを認識・教化する	違いを理解し、実践して対話する
政策の実現	体系的なプログラム、単発性	新しい観点からアプローチ、必要なところに集中して行う

文化多様性教育政策の特徴をこの表にまとめました。

皆さんに一番見ていただきたいのは、教育対象の項目です。「消極的多文化主義教育政策」は移民に対して行うものであるのに対し、「文化多様性教育政策」ではマジョリティーとマイノリティーがすべて含まれていて、一緒に授業を行います。

私自身も韓国人の学生と多文化の学生を一緒に教えていると、どちらが韓国人でどちらが多文化の学生か分からなくなりました。ここは、どちらのやり方を選ぶかで大きな違いが生まれる部分だと思います。ほかにも「集団の形態」、「アイデンティティー」、「政策の方向性」、「アプローチ」など様々な点で2つのやり方の違いが分かると思います。

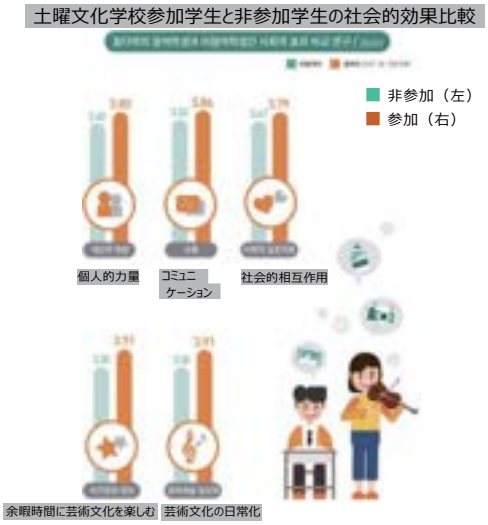
また、アルテが定めた「文化多様性教育においてキーとなる12の価値」についてですが、核となるキーワードは、1.尊重、3.人権および平等、10.共存、12.社会的正義です。これらは、いま様々な事業において最も大事だとされている項目です。プロジェクトが採択されるかどうかは、この点がしっかりと打ち出されているかどうかにかかっています。

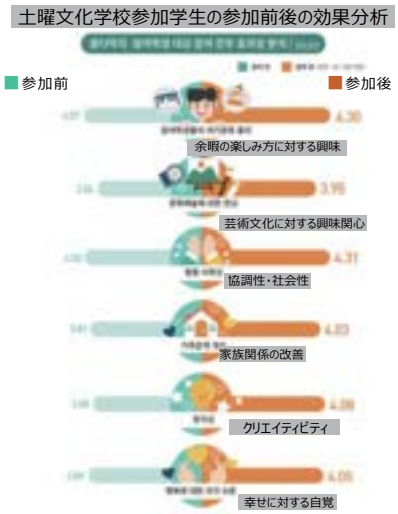
■ **夢シリーズ**

次にご紹介するのが、先ほどの＜「社会文化芸術教育」分野の事業リスト＞でスマイルマークがついていた「夢シリーズ」です。このシリーズは対象が、児童青少年及びその家族となっています。家族も含まれているのが大きな特徴です。家族も一緒に参加できるプログラムを運営支援していまして、近い年ごろの子ども同士、そして家族同士が、一緒に文化芸術活動を行う、コミュニケーションできる、そういう文化を作ることがこのプロジェクトの目的になっています。

こうしたプロジェクトの多くは児童のみ、青少年のみを対象としたものが多いのですが、家族まで含んでいる点が大きな特徴であると同時に、支援の対象分野もすべての文化芸術ジャンルとなっています。少しご紹介しますと、建築、工芸、遊び、デザイン、舞踊、文学、写真、旅行、演劇、ミュージカル、映像メディア、音楽、伝統芸術……ほぼ全部の分野をカバーできるような支援を行っていて、この中でも「夢が広がる土曜文化学校」は一番大きく、最も古いプロジェクトでもあります。

続きまして、その「夢が広がる土曜文化学校」でどのような成果があったのか説明したいと思います。土曜文化学校は昨年が10 年目でした。それで大きな記念プロジェクトもありました。





（右側のグラフ「土曜文化学校参加学生の参加前後の効果分析」について）左が参加前、右が参加後です。数字だけ見ると、そこまで飛躍的に伸びた、著しく変わったということ はないようですが、幸福度に関する点が非常に興味深いです。

子どもたちが家族とどのように変わっていくかとか（家族関係の改善）、幸せに対する自覚が変わったとか、幸福度に関する変化が面白い。これは夢シリーズが、先ほどもご紹介したように家族も一緒に参加するプロジェクトだからこそ、こういう項目に関しても 研究調査を行っていると考えられます。

右側のグラフの3番目、「協調性・社会性」という項目は、社会文化芸術の中には演劇でなくても、一緒に行うもの、グループでやるものが多いので、この項目は演劇だからこそ伸びたということではないと思います。

私がいちばん興味深いと思うのは1番上と2番目、「余暇の楽しみ方に対する興味」、「芸術文化に対する興味関心」が増えてきたというところなのですが、先ほどご紹介したアンサン市の例で言うと、そこは海に囲まれた地域で島が多いのです。（注：海沿いの町の部分と、島になっている部分で構成される）そして島のほうに住んでいる子どもたちは、文化に触れる機会が本当にないのです。

「夢シリーズ」のプロジェクトが来たときにだけ、演劇や絵など、芸術に触れる機会がある。そして自分を表現できる機会がある。色々な機材も初めて見る。ですから私のプロジェクトに参加した子どもたちは、演劇や映画を初めて観たという子が非常に多い

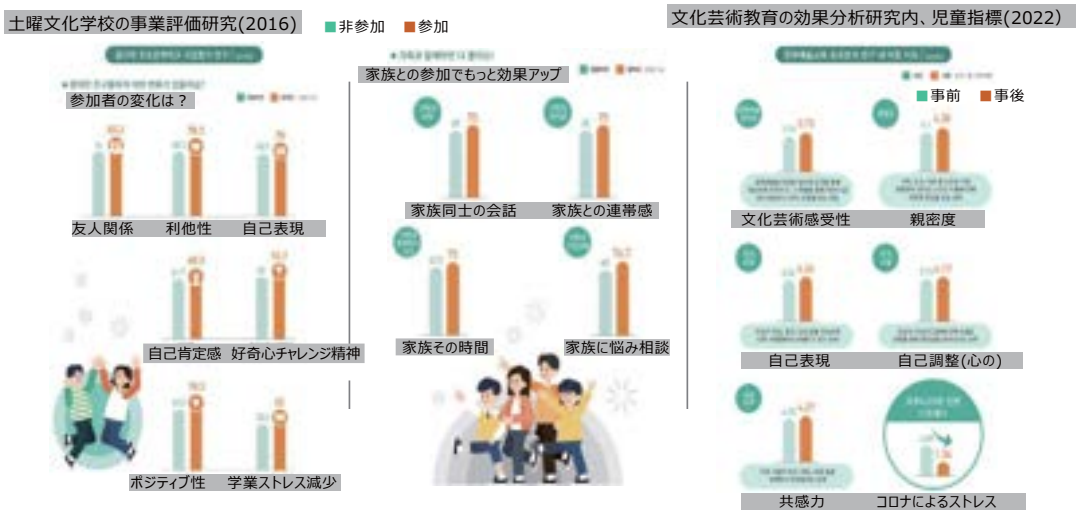
のです。このようなカテゴリーだけでなく、子どもたちに新しいものに触れる機会を与えることができるという意味でも、非常に意味があったのではないかと思っています。

先ほどの画像の左側は、土曜文化学校に参加した学生と参加していない学生の社会的効果の比較です。

この中で私が最も注目したのは「芸術文化の日常化」という項目です。土曜文化学校は規模が大きく、1年単位のものも多いのですが、条件さえ合えば翌年にも続けて行えることが多いです。文化芸術教育分野で活動している芸術教育家たちが一番抱えている悩みは持続性です。こういうプロジェクトは単発のものがすごく多くて、本当は続けていってもっと発展させたいと思ってもそうならない。それは芸術家の生計とも関わってきます。単発で終わってしまうと、芸術家側は残念に思うし無力感を感じることも多いです。

その点、「夢の土曜文化学校」の場合は、3年から、長いものは10年続くものもあります。昨年、私がアンサンで関わったものも継続され、今年で2年目を迎えたと聞いています。そこに参加したアンサンの小学生たち、障がいを持っている子たちも、多くの子どもたちが「来年もやるならまた参加する」と再参加したそうです。やはりこのグラフに現れた通り、芸術文化の日常化も持続性も達成できているということで、非常に意味のあるプロジェクトだと思っています。

次に見ていただきたいのは、土曜文化学校に参加した子が、参加していない子と比較して、個人の中でどんな変化があったかという調査です。すべての項目において参加した子にはポジティブな変化が現れています。



図表のまん中は家族と一緒に参加するプログラムに関しての質問です。韓国も日本と同様にひとりっ子が非常に増えています。共働き家庭が多く、クラス20 人の中でひとりっ子に手を挙げてもらうと10人から15人くらいが手を挙げます。

この土曜文化学校において家族の参加は義務ではありません。でも、芸術教育の役割としてどういうものができるのか、アルテの12 のキーワードのうち重要視されている4つのキーワード（尊重、人権および平等、共存、社会的正義）をどのように盛り込んでプログラムを組むかを考えたときに、家族と一緒にやったほうがいいという結論が出ました。

自分の中では子どもたちと一緒にやるものが多かったので、家族と一緒にというのは大きなチャレンジでしたし、緊張もしましたが、結果的に子どもも親御さんも皆の中で、文化芸術というものに対する抽象的な、漠然としたイメージが変わりました。

やっぱりやってみると感じるものが全然違うというのもあるし、ひとりっ子が多い中で、家族と一緒に過ごす時間や話し合う時間も増えたり、これを通して家族で悩み相談もしやすくなったり、そういう変化が色々見られて、非常に達成感を感じました。

右側は、2020 年にコロナの真っ只中で行ったプロジェクトの調査です。私は昨年参加したのですが、そのときはオンラインとオフラインを混ぜて実施しました。しかし2020年は100% オンラインでした。にもかかわらず、さまざまな要素がポジティブに変化しており、コロナによるストレスも大きくダウンしました。

■ 多文化関連事業の事例紹介

続いて、夢シリーズがどのように行われているのかを動画で見ていただく時間を持ちたいと思います。初めは「夢が広がる土曜文化学校」です。これは様々なジャンルのものを取り扱っているのですが、その中で演劇を扱った回を見ていただきたいと思います。

動画スタート

通訳 シム・ヒョンミンさんによる説明

○**シム** 遊びを通して演劇の基本的な構成を学んでいるところです。

子どもたちへのインタビューです。「自由で誰でもできるのが演技だと思った」、「こういう小物を使えば、ぼくも演劇ができるということが分かった」、「演劇は結構難しそうだなと思ったけど、全然簡単だった」、「協力するのが演劇なんだと感じた」などと答えていました。

子どもたちが「どういう授業が記憶に残ったか？」という質問に答えています。「＜体で話そう＞という課題があって、その中で先生たちがさまざまな動物のモーションを見せてくれて面白かった」、「目隠しして生活するという課題があってそれが楽しかった」、「探偵ごっこという企画で部屋に入ってその中のものを見てどんな人物が住んでいるか想像するのが面白かった」という感想がありました。

子どもたちは「これは1人では絶対にできないこと。友達がいるからできた」、「自分が表現できるものもあるし、自分で台本も書いたりするのも面白かったし、皆でゲームも、演劇も、遊びもできるから楽しい」と言っていました。

アンさんは演劇という表現手段を使って、トレーニングではなく、過程を子どもたちに楽しんでもらうことが大事だとおっしゃっています。この授業の最後には発表会もあり、親御さんもこれを見に来たり、一緒に参加するものもあるのだそうです。

○**アン** 次は「夢のオーケストラ」の動画を見ていただきたいと思います。

○**シム** 「音楽は力」、「子どもたちの成長を助ける」、「夢のオーケストラ」というタイトルが出ました。こちらはキョンギ道のピョンテクという地域の動画です。キョンギ道の最南部にあり、かなり辺鄙な場所です。子どもたちは普段から文化芸術に接する機会

が本当に少ないのですが、このオーケストラで楽器を体験し、皆で練習して、最後は発表する機会もあります。

これに参加した人の感想をご紹介します。

多文化学生「最初は行きたくない、色々な人と何度も会わなきゃいけないのは大変なのではないか、と思ったけど、やっていくにつれて音楽とも楽器とも皆とも仲良くなって、行くのが楽しみになった」

音楽監督「音楽を通して、人としての成長をうながせるし、例えこの子たちが音楽専攻にならなくても、これがひとつのコミュニティーになって、子どもたちがまた戻れる場所、誰かと話せる場所になってくれると信じている」

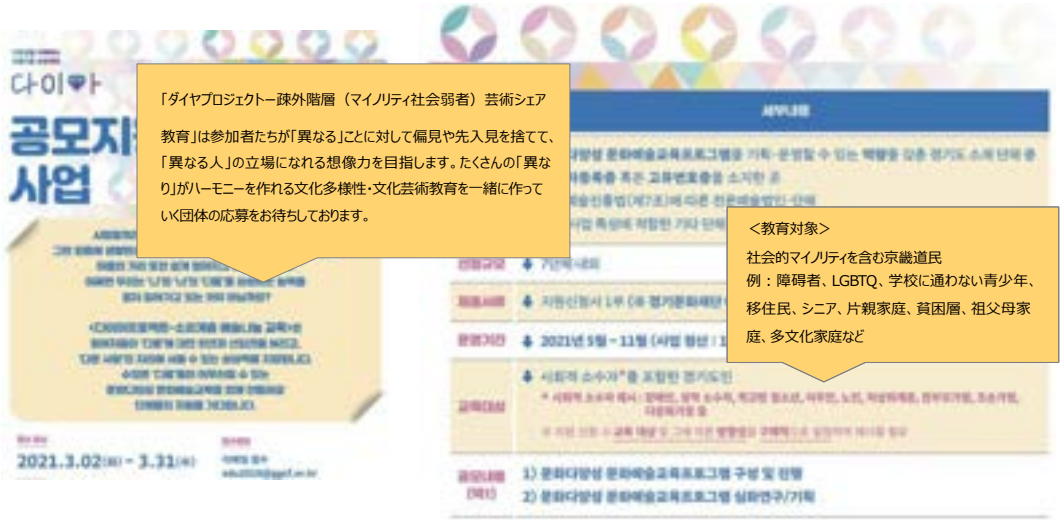
最後に、最近行われた「夢の舞踊団」をご紹介します。

動画終了

○**アン** ほんの一部の事例ですが、2019年、2022年に行われたものをご紹介しました。この他にも色々な事業があり、多岐に渡ってやっているということを申し上げておきたいと思います。

ここまではアルテが主体となってやっている事業でしたが、ここからはソウル文化財団、キョンギ文化財団がどのような事業を行っているかをご紹介します。

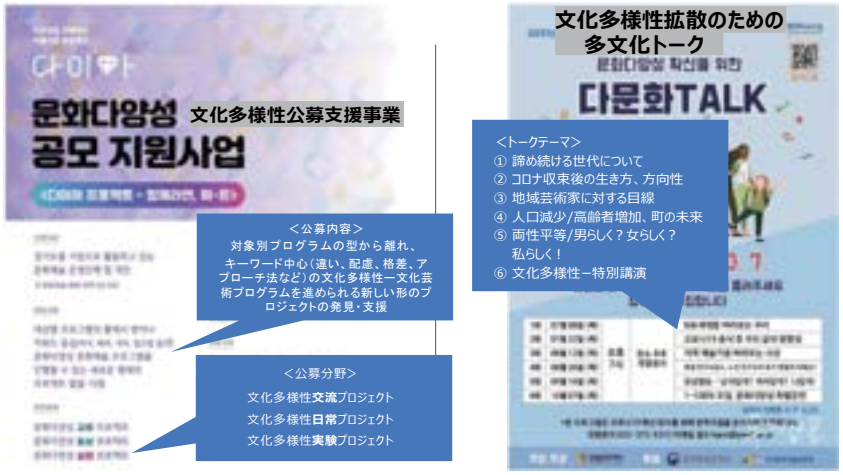
「ダイヤ（多様性を理解する美しいプロジェクト）」公募支援事業



https://youtu.be/h9km7GDSX0o
다이아 참고 영상

キョンギ文化財団がおこなっている公募事業です。「多様性を理解する美しいプロジェクト」という韓国語の「多様性」、「理解」、「美しい」の頭文字をとると「ダイヤ」となるので「ダイヤプロジェクト」といいます。

公募の対象は「社会的マイノリティーを含むキョンギ道民」で、図の右側にその内訳が書いてあります。企画を立ててこれに応募し、選ばれたら、その事業が行えます。2つの分野で受け付けています。1つが文化多様性・文化芸術教育プログラムの構成および進行。実質的に行うプロジェクトを募集しています。もう1つが、そのような文化芸術教育プログラムの研究内容の募集です。



こちらの図の左側、ダイヤは今年も続いています。右側は「文化多様性拡散のための多文化トーク」ということで、これはヨンウォル文化財団というところのものです。ヨンウォル（寧越）はソウルから見たら南にある地方都市です。こんな辺鄙な地方都市でも活発にプロジェクトをやっているということを皆さんにご紹介したいと思いました。

左側は多文化図鑑です。美術と関連して行われた文化芸術教育です。右側は多文化演劇教室です。シェイクスピアの『ヴェニスの商人』を題材にして多文化を理解する時間を持とうというもので、今年、図書館で行われた多文化サービス支援事業のポスターです。

■ 多文化芸術教育の事例共有

最後に、私が実際に関わった多文化芸術教育の事例をご紹介したいと思います。

경기도안산시지역아동센터 통합예술교육'내마음을말해줘'

京畿道アンサン市地域児童センター
統合芸術教育「私の心を話して」

• 추 진 계 획 **推進計画**

皆さんにご紹介したいのはキョンギ道アンサン市の地域児童センターで行った統合芸術教育「私の心を話して」というタイトルのプロジェクトです。参加した子どもたちはほとんどが小学2年生で、全員ではないですが、多くが多文化家庭の子どもでした。そうした背景を知った上でこのプロジェクトを企画運営しました。

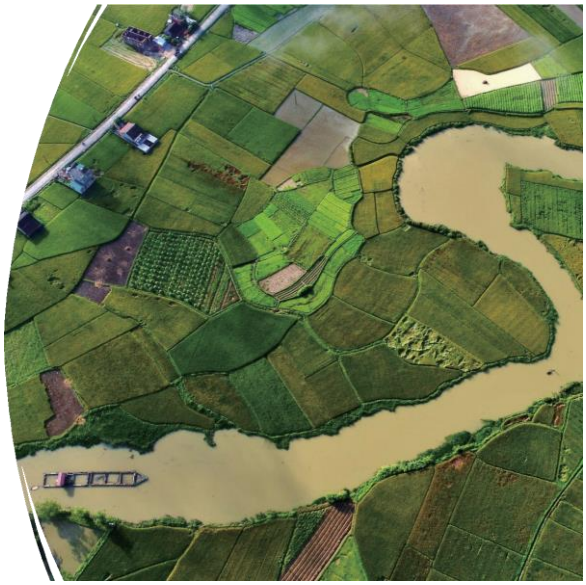
私は2年間、このプロジェクトに関わらせていただいて、子どもたちとも2年間続けて会ったのですが、総合芸術ですので私の専門外である絵とか映像とか、そういったものも全部交えたプロジェクトになっています。

子どもたちの写真をご覧いただいていますが、この中でいちばん印象に残っているのは真ん中の写真の女の子です。この子は3年生という幼さにも拘らず、自分が海外から来た、皆と違うルーツを持っているということに対して非常にストレスを感じていて、差別の経験などが大きな傷として心に残っていました。

そうした傷を、皆と一緒に話をして表現する、そして自分が受けてきたストレスはどんなものなのか、負っている傷はどんなものなのか、皆に伝えたいことは何なのかというのを、皆の前で話したり共感してもらったりという過程を見せてくれました。テーマが「友情」だったのですが、その友情というタイトルの演劇が非常に記憶に残っています。

베트남 문화예술교육 ODA 공적개발원조
(Official Development Assistance)

ベトナム 文化芸術教育 ODA 公的開発援助
(Official Development Assistance)



次に、昨日ユさんの話にも出てきたベトナムで行われた「文化芸術教育ODA公的開発援助プロジェクト」についてです。1ヶ月間ベトナムに居住して行ったプロジェクトです。

ベトナムに韓国の文化芸術を伝えるというのも目的ですが、彼らが普段習っている教科書の学習内容をTAも学ばせてもらう、お互いに交流する場でもありました。主にラオカイ省という地域の総合技術職業学校に通っている青少年を対象にしたものでした。

左下の写真がベトナムで使われている国語の教科書の1つなのですが、ここに載っている文学を1つ取り上げ、演劇を媒体にして文化的な交流を行いました。

彼らもこういう芸術教育プログラムが本当に初めてで、何なのか分からない。そしてTAたちも、ベトナムの少数民族の文化も初めてですし、そこで行われている教育の方式が韓国とは違っていたので、そこを詰める作業、お互いに分かり合うにはかなり時間がかかりましたが、その過程は私たちにとっても貴重な学びの機会となりましたし、お互いにとって意味のある時間だったと記憶しています。

한국펄벅재단 다문화 청소년 지원 프로그램
(Pearl S. Buck Foundation Korea)

韓国パールバック財団の多文化青少年支援プログラム

最後にご紹介するのは、韓国にあるパールバック財団が行った多文化青少年支援プログラムについてです。

これはソウルの近くのインチョン（仁川）という場所にある財団です。その財団に所属している多文化の青少年を対象とした放課後の教育プログラムの一貫として作られたプロジェクトでした。私はそこに所属している子どもたちと演劇を作るプログラムを行い、日程の最後に自画像というテーマで子どもたちと演劇を作って発表しました。

私はここで様々な文学作品を取り上げましたが、最初に取り上げたのが『不思議の国のアリス』です。まず4週間は体づくりとして俳優になる本格的な準備過程を踏んで、そのあとに自分たちで物語を作っていくという過程まで持っていきました。

『不思議の国のアリス』で俳優に必要な基礎的な体づくり、物語づくりを学んだら、その次の作品では共存と共生に関して物語を考えてみるという勉強をして、作品自体よりも作っていく過程を中心に学びます。次は自分のアイデンティティーに出会うことをテーマにするという風に積み上げていきます。

それから『私は赤い』という韓国で読まれている青少年向けの詩を使いながら自分を見つめ直し、最後に『自画像』というタイトルで公演を行なって、そこで自分の話を皆の前でします。自分は人生とどのような向き合い方をしているのかとか、そういう話を、あまり言語を使わずにノンバーバルで表現する演劇となります。

2021 Afterschool Academy 발표회 - YouTube

作品の映像をほんの少し、皆さんに見ていただきたいと思います。『自画像』というタイトルの作品です。

動画スタート

途中で女の子が独り言をしゃべっているシーンがあります。この作品を準備する過程で行った色々な活動の中で、自分が今まで抱えてきた（周囲と自分が）違うことを理由に受けた差別とか、偏見の目で見られた心の中の傷やストレス、そういうものを独り言のように呟くシーンでした。

■ 最後に

ここまで、皆さんに多文化共生とか文化多様性というタイトルで行ったプロジェクトを見ていただきましたが、その中で私が子どもたちに一番言っていたのは「多文化に対する理解と共感」です。

これは多文化の当事者だけでなく、それをちょっと離れたところで見ている一般の学生たちが「いったい多文化とは何か」ということと、それが「自分自身と何の関係があるのか」という疑問に気付くようにする、そのための大事な活動なのかなと思っています。

その理解と共感をベースにして、プロジェクトへ参加することで、「皆で一緒にやっていく」という気持ちが育まれたというのが、大きな変化だったと思います。

そして最後に、ちょっと悲しい現実ではありますが、私が関わった文化芸術関連事業に参加した子どもたちのほとんどは、こういう経験が初めてでした。そのようなことに持続的に参加することによって経験が増え、それに伴って文化芸術に対する関心も高まるということが見られます。社会的にも意味のあることだと思います。

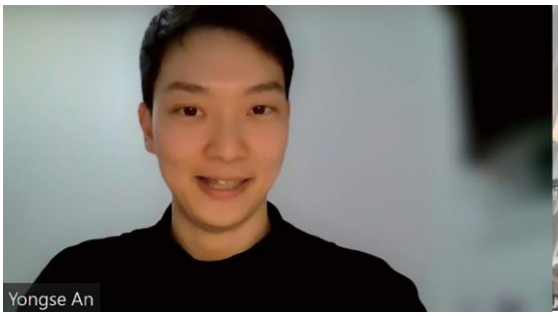
ひとつ、限界というか、これはやめなければいけない部分だと思うのですが、日本語で言う「外国人」に当たる韓国語の「多文化」という表現が、ときに暴力的に使われます。「あなたは違うでしょう」という前提が入っている言葉として使われることが多いのが悲しい現実、限界ではあります。

「多文化」というものが「違うもの」ではなく、一般的で誰にでもあり得るのだという常識が伴うべきですし、これに対する認識、理解が、活動の中だけではなく、多文化に関わっていない人たちにとっても常識になるべきだと思っています。

活動していく中で私自身感じたのは、多文化社会の定着が成功するためには、多文化ルーツを持つ人たちを中心に据えたプロジェクトも大事ですが、そういう人たちのための国家的政策が大事なのだということです。私たちだけがいくらがんばっても、見た目だけ「がんばってやっている」という感じが出るだけで、実際、その人たちのためになっているのか、その人たちにとって必要なものは何なのかということが、見つめ直されていないのではないかという葛藤を感じることもありました。

これで私の発表を終わります。皆さん、長い時間ありがとうございました。

◆ 質疑応答



○**柏木** ミン先生、いまのレクチャーをお聞きになっての感想や質問をお願いいたします。

○**ミン** 私自身も日本における在留外国人の文化芸術活動の調査研究をしているので、今日のレクチャーを非常に興味深く聞かせていただきました。ありがとうございます。

演劇を通して得られる力は、例えば他者の気持ちを理解する力、それから他者の状況に共感する力だと思っています。これは多文化共生社会を実現するにあたっても通じるものではないかと考えます。演劇は多文化共生社会を作っていくのに絶対に役に立つと思っています。

質問が2つあります。実際にアンさんが作り上げた演劇の事例を紹介していただいたのですが、そこに参加している学生の、韓国人と多文化家庭の学生の割合はどうなのでしょうか？　2つ目は、参加前と参加後に分けて評価されていますが、実際、演劇のとても大事なところは創造活動のプロセスだと思っていまして、つまり参加してから公演までの稽古の時間、このプロセスが非常に大事だと考えております。それで、学生が稽古に参加してどのように徐々に変化してきたのか、可能な範囲で様子を教えていただけたらなと思います。

○**アン** 先生のおっしゃった通り、私も、演劇は他人に対する共感であるし、自分自身を発見することでもあると思います。そしてそれを動き、言語と非言語の部分で合わせて表現する、そこに最大の魅力があるのではないかと思うのです。私は大学で演劇を専攻して、大学院では教育演劇という方法論的な部分の勉強をし始めたのですが……

1つ目のご質問の答えは、100%多文化の学生でした。

それとは別の事例でご紹介した、地域児童センターで行った多文化芸術プログラムでは韓国人と多文化の学生が半分ずつでした。

これらのプロジェクトは1回で終わるのではなくて、1年から2年、長期に渡って行われたものでして、子どもたちの変化は非常に見えやすかったという部分があります。社会文化芸術分野の事業は、関係者たちとも長く絶え間なく交流を行なって、子どもたちの変化についてもフィードバックをするチャンスが多かったです。

図表でご説明したように、活動の前と後でそれほど著しい変化はないのですが、例えば、『自画像』という演劇で喋っていた女の子は、関係者たち、センター長や職員たちの話を聞いても、とても内気で消極的で自己表現のあまりできない、そして周囲の偏見にさらされた経験が心に刺さっている子でした。

過程における一番大きい変化は、やはり「人と違うということが、逆に考えると1つの可能性にもなり得る」ということです。人との違いは私の才能なんだ、これは1つのチャンスなんだということを、演劇を作っていく過程で自分自身を見つめ直し、そうした気持ちを絶えず人の前に出し、さらけ出して、自分のことを発見していく。その可能性に気づくということがいちばん大きな変化だったのではないかと思います。

差別を受けたり偏見にさらされるといったような、一般の人々は普段経験しないであろう辛い経験が、物語を作るときは逆に自分の強味になっている。そして自分が本当に経験した痛みだからこそ、傷だからこそ、人に語ったとき「本物だ」、「これは本当の物語なんだ」という風に皆に伝わった。

かつて、自分をすごく小さく小さく見て「私なんか、私なんか」と言っていた子どもたちが、最終的には主人公になって、自分の声で自分の物語を人前で披露したというのが、一番大きな変化だったのではないかと思います。

○**ミン** ありがとうございます。

○**柏木** ではオンラインで視聴参加されている方からの質問をいくつか取り上げてお聞きしたいと思います。

1つは、アンさんに先ほど見せていただいたビデオのリンクを共有していただくことは可能でしょうかという質問です。

○**アン** はい。可能です。

○**柏木** ありがとうございます。では、それはあとで教えていただきます。

もう1つ、私も多文化共生プログラムを日本でやったりするのですが、同じような疑問が沸いたので。参加希望の方が海外にルーツがある方が多いときに、韓国語がまだ上手ではない場合、参加する際にハードルがあるでしょうし、入ったあとでのサポート体制はどうなっているのでしょうか？

○**アン** これについては、私はある意味、この分野に特化している部分があってなんとも言えないのですが、私は「創意的な動きドラマ」という分野を研究して論文も出しているので、言葉を使わない演劇の作り方のノウハウをある程度持っていたのです。

ですから、私の場合はプロジェクトを組むときに、選択的に言葉を話さないという病気があるのですが……専門用語が日本語にちゃんとあると思うのですが、自分が話しやすい雰囲気で話すのだけど、「あ、これはダメだ」と思ったら黙ってしまうという……そういう心の病気があるのですが、その病気を持っている子どもたちのプロジェクトを作っていたのです。

このプロジェクトは、多文化学生たちにもぴたりと当てはまりました。韓国語をうまく話せない子どもたちにとっても、このプロジェクトの方法が当てはめやすかった。そして韓国語での意志疎通が難しい子どもたちにとって共感しやすいプログラムになっていたのです。

ですので、個人的には多文化学生だからといって意志疎通が難しかったというのは、正直なところあまりなく、言語を用いてコミュニケーションしなければいけないという強迫観念をちょっと置いておけば、プロジェクトを運営する上では逆に好都合の部分が多くて、音とか、私の表情で、私が何をしているのか当ててみて、というような面白い遊びをしたりしていました。

私も現在、外国人という立場でカナダに住んでいまして、英語が流暢なわけではないので苦労しているのですが、私自身が思うのは、言葉ができないからコミュニケーションが取れないのではなくて、自分が相手と違うことを否定的に受け止めることでコミュニケーション障害が起きるのではないか、そこに壁ができてしまうのではないかと。

言葉ができるできないより、子どもたちが、自分に欠けていると思っている部分、自分はダメだと思う部分をキャッチして、そこをどうやって助けてあげるのか、言葉以外の部分をキャッチすることが大事なのではないかと思います。

自分はマイノリティーなんだという意識ではなく、一緒なんだ、みんな違いがあるんだということを子どもにどうやって伝えながら参加させるのか、私は一番そこに重点を置いてやっていました。

○**柏木** ありがとうございました。いっぱい話したくなってきましたが時間になりました。

チャットにもまだ残っている質問があるので、メールで問い合わせて皆さんに返したいのですがご協力いただけますか？

○**アン** はい。承知しました。

○**柏木** ありがとうございます。では今年度の韓国特集はここで終わりたいと思います。ミン先生、アンさん、ありがとうございました。